2年次ドイツ語ＬＣＣ（言語文化コース）－主に理学部－の授業について

茅野　嘉司郎

半期で終了し、履修者が40～50人もいるこのＬＣＣの授業は、相当に大変である。何が大変かというと、とにかく一人の落伍者も出さずに最後まで授業をすることだといってよい。ついてこない学生が悪いのだというのは、ついてこれないような授業をする教師の側の言い訳ともとれる。しかしながら、始めから出てこないで、期末試験も受けないような学生を落とすのは、仕方ないとはいえよう。そういう学生は、ほとんど再履修の３、４年生である。たとえば今年度（2000年度）の私のクラスの場合－理学部と観光学部・コミュニティ福祉学部の前後期２クラスずつ－、理学部前期のクラスで５人（全員３年生）、観コミは０、理学部後期のクラスでは３人（３年生２人、４年生１人）、観コミは１人（２年生）という結果で、これらの学生以外は全員合格したのだから、自分としては（中身は別にして）満足している。しかし、理学部前期の５人は少し多かったと反省せざるをえない。その中には１～２回は出てきた者もいて、そうした学生にうまく対応できなかったことが悔やまれるのだ。掲示による呼び出しだけにとどまらず、早い段階で教師と学生が個別に話し合う必要があったと思う。

さて、授業の中身についてであるが、これが一番肝腎であることはいうまでもない。旧カリからの長い経験で言えるのは、途中であきらめてしまう学生が少なからずいることである。つまり授業についていけないのだ。大体の場合、彼らにとって、教師が用いるテキストが難しすぎる。要するに、教師が思っているほど学生はドイツ語ができるわけではないのだ。たった１年間しかドイツ語を習っていないのである、できるわけがない。１年次のドイツ語教育がだめだからだと批判する先生もいるかも知れない。しかし週２回の授業で１年間、いったいどれだけのことができるか。私から言わせてもらえるなら、全カリになって新たに取り組まれたドイツ語教育の成果は、確実に現れている。にもかかわらず、学生が勉強しなくなったと嘆くのは、彼らの学力の低下ばかりでなく、彼らの求めるものが変わってきたことに対する、教師の側の認識不足と対応の鈍さにも起因していないか。

そういうことにも関連して、ここ数

年私が授業で取り上げる内容は、比較的学生の関心の高い環境問題が多くなっている。ドイツが環境先進国ということもあるが、私自身なるべく環境にやさしい生活をしたいと思っているので、これはぴったりなテーマなのである。このテーマのテキストは、学部に関係なく使えるだろう。またドイツ語自体もオリジナルなものではなく、初学者用に易しくしてあってーそれでも学生にとって容易ではないがー授業も大変進めやすい（ちなみに私が後期理学部のクラスで用いた郁文堂の『環境問題シンポジウム』というテキストはなかなかユニークで、使いやすかった）。扱い方にもよるが、いきなりオリジナルな文章、たとえば論文、新聞・雑誌の記事などを読ませるとしたら、まず学生は１～２回の授業でドイツ語が嫌いになってしまうのではないだろうか。たとえ文法の復習をしながら、ということであってもである。

自身授業のやり方で定着しつつあるのが、二本立ての方法である。前半３０分を独作文、そのあと60分をテキストの読解に費やすというものである。これの最大の利点は学生が退屈しないことである。つまり同じものを90分やり通すことは、今の学生には困難なのである。途中で休憩を入れる先生もいるようだが、それだとやはり時間がもったいない。それと、ドイツ語学習で不足していると常々思ってきたこと、すなわちドイツ語を書くことの実践が毎回できる効用は大きい。ドイツ語の構文を理解する上でも独作文は有意義であろう。また、以前は授業の最初の２回くらい文法の復習にあてていたが、簡単な独作文から始めることで、その必要もなくなった。動詞の人称変化、名詞の性や格変化など、すべて独作文を通じてその復習ができるのである（学生に配るプリントは、同学社のテキスト『初めての独作文』を元に、私が自分で作成した）。

テキストの読解についても、今は以前とかなり異なった方法を採っている。全カリ２年次ＬＣＣの授業は、「ドイツ語を媒介とした異文化理解と異文化対応能力の錬磨」を目指していて、ドイツ語はあくまで手段にすぎない。とにかく内容重視である。以前しばしばあったような10数行のドイツ語とのにらめっこはやめ、一回に２～３ページ読んでしまう。私が採用するテキストも、大体１章がそのくらいのページ数である。そして、できれば内容について考え、自分の意見を述べることをーもちろん日本語でよいー学生に課す。

さてしかし、一回に１章も読めるかと疑われよう。だが学生は全部のドイツ語を読むわけではない。ここが私の方法の私にとってもっとも大変なところで、結局私自身が１章全部の訳を作っておかなければならないのである。そして内容上かつ文法上ポイントとなりそうな４～５個のドイツ語の文を選び、そこだけを学生に訳させる。そこを空欄にした以外すべて私が訳をつけたプリントを毎回学生に配り、まずざ

っと目を通して大体どういうことが書かれているか、何が問題となっているかを把握させ、それから４～５人に空欄部分の訳を黒板に－その場で辞書を使って調べさせ－書かせる。他の学生たちにも自分で辞書を調べてプリントに訳を記入させる。黒板の訳の検討と本文の内容との関連を私が指摘したあとで、「あなたならこの問題についてどう考えるか」という質問に学生各自の考えをプリントの余白に書かせ、そのプリントを提出させて、授業は－あっという間に－終了となるのである（と、これが私としては理想的な展開なのだが、たまたま後期に使ったテキストがこれに沿う作りになっていたのが幸運で、いつでもうまくいくとは限らない）。

学生の毎回の提出物は、このプリントと作文のプリントの二つとなる。作文は課題作文として２題出している。結局学生が家でやって来るものは、この課題作文だけである。テキストの予習は強制しない。「この授業は予習を前提とする」などと威しても、やって来る学生は経験上きわめて少ないのだ。情けないけれど、自分の学生時代に照らしてもそうなのだから仕方ない。それよりも授業に毎回出席し、そこで真剣に勉強してもらえればよいのである。

一見ハードそうな授業だが、提出物に関して「遅れてもよいから必ず出すように」「休んだ分のプリントもあとで出せばＯＫ」という甘い条件のためか、特に後期に関しては学生の出席率は非常に高かったし、提出物もほとんど出そろっていた。一人一人、何を提出し、何を提出していないかもチェックしてあるので、それを学生に伝え、あとで出させるようにできた。毎回、授業の始めに前回のプリントを返していると、学生の名前と顔がほとんど一致することとなった。

以上、実はプリント教材の作成や提出プリントのチェックなど教師の側の準備がけっこう大変なので、週末をつぶしたくない（？）先生にはお勧めできないやり方である。しかしこれに慣れた私にとっては、週末の一日くらい準備に係り切りになっても、充実した授業ができる満足感の方が大事に思えるのである（ああ、だけどなぜ観コミのクラスでは思ったほどうまくできないのだろう？）。

（ちの　かしろう
本学ランゲージセンタードイツ語嘱託講師）